



南三陸町の今

「5時間半で着きました」

現在、南三陸町志津川地区では、食料品・日用雑貨・衣類など30店余りの仮設商店街ができました。そこで開催される福興市で移動おもちゃ図書館を開くために先月25日（土）、荒川区社会福祉協議会の稲葉さん達は宮城県南三陸町に行つて参りました。

「子供達が元気になることで大人も元気になれる」

おもちゃ図書館は全国組織であります。福興市の買物がてらに、子供達が入れ代わり立ち代わり遊びに来てくれました。帰りたくないと言った子どももいるくらい、楽しんでくれました。かなめとなる子どもが元気になることで家族が元気になります。

その中、電車を線路から脱線することを繰り返す子どももいました。子どもの心の傷が脱線させることで発散されるのでしょうか。

東北地方は、文化・スポーツが盛んなところですが、グラウンドでサッカーしている少年達は、いきいきとして安心しました。

南三陸町は、震災を受ける前の平成23年2月末では5362世帯人口1万7666人でした。

そのうち津波被害を受けた集落は4315世帯です。今年8月には4887世帯1万5309人と約500世帯2300余人、減少しました。南三陸町の世帯数、人口は南千住地区全体よりも少ない数です。

「ガレキの山が増えました」

被害の大きかった海沿いの志津川地区では、屋根に乗ったままの自動車も下ろされ、昨年12月に訪れた時に比べ、片付けられていました。

しかし、その分あちこちにガレキの山ができていたそうです。お店があったところには、パネルがあちこちに立てられて、そこにお店があったことを示していました。ガレキ地面には草も生えていました。

「こぼれが出ない」

テレビや新聞で見ることで感じ取れないのは、空気、海風や緑の香りです。直に感じる被災地の空気に触れて同行した稲葉さんの奥さんはこぼれが出ませんでした。

「ツアーバスが多かったですね」

被災地の方達は、現状を知って欲しい。また来てもらうことで、観光が復活します。志津川地区の骨組みだけになった防災対

策庁舎には、簡易卒塔婆や千羽鶴や花を手向ける場所も設置されています。

ここでは、42名の方が犠牲になっています。ここを震災を伝える遺構として残すのか、解体するのか遺族の気持ちも揺れています。

しかし、そのような場所で記念写真を撮る人達には疑問が生じました。

被災から1年半経ち、私達の心の中で被災地のことが風化され、対岸の火事になっているのでしょうか。

阪神淡路大震災が起きたのは平成7年1月のことでした。今から17年前のできごとです。

「後学のために子どもに見せたい」

当時、そんな言葉を平然という知人に啞然とした記憶があります。相手の気持ちに寄り添うのではなく、スカイツリーや映画を見に行くような観光、他人事感覚でいることが、理解できませんでした。

マスコミの報道も少なくなり、3月11日の震災が風化されつつあります。ボランティアの数も減ってきていると聞きます。

「がんばっぺ 南三陸」

遠く離れた私達にできることは、被災地の方々が今復興に向けて必死に前を向いていることを忘れないことではないでしょうか。